

いまどきの学校 教育現場の風景

■43■

往年の名車として知られ、人気漫画にも登場するトヨタの「スプリンター」トレノAE86型。マニアを魅了したシャープな車体はそのままで、爽快なエンジン音とどろくことばなく、車体は静かに動きます。

九州工業大情報工学部(飯塚市川津)の学生サークル「e-car」が所有するトレノ86はコンパクト電気自動車(EV)。ガソリン車からエンジンなどを取り除き、モーターや鉛蓄電池を積み込んで動かす。最高時速は約70キロ。車検も通っているため、一般道での運転も可能だ。

これまでEVの全国大会(四国EVラリー)で2度の優勝を誇るほか、昨年は茨城県の筑波サーキットで開かれた「日本EVフェスティバル」チヨーンルンアン准教授は

大学サークル

て楽しさを知ってほしい」とものづくりの楽しさを伝える。

e-carの前身になるサークルが誕生したのは2009年。当時はこみ拾いなどを

行うボランティア団体だった。学生に頼まれて顧問に就任した同学部のハナート・カチヨーンルンアン准教授は

電気自動車に青春かける



電気自動車の研究を続ける「e-car」のメンバー。ボンネットを開けると空間が目立つが、最高時速70キロで疾走する

「活動の日なので来ません。楽しく飲み会をやるのがメーカで学生に誘われると、そのサークルでした」と笑顔。飲み会だったことも。当時は、で振り返る。

EV製作を助言したのは同学部の鈴木裕教授(当時)。必要資金は100万円、学生主体のプロジェクトに挑戦しようと呼びかけ、田川市の豆腐店から不要になったトレノ86を譲り受けた。

「指導者も学生も専門分野外。エンジンを換えれば動くくらいに思っていた」(ハナート准教授)が、甘くはなかった。トレノ86は後輪駆動車のため、モーターとギアボックスとの連携が一般的な前輪駆動車よりも複雑だった。飲み会サークルの気軽なノリだけでは作業もなかなか前に進まず、学内を走らせるまでに1年以上を要した。

それでも実際に車が動いたことで、学生のやる気も高まり、蓄電池の重量バランス調整や絶縁対策などの難題を次々と克服していった。

現在の部員は10人で、OBの大学院生ら約10人も積極的に関与している。ただ、研究開発に加えてレース参戦時には運搬車を借りるなど、多額な資金が必要。部長の寺山裕さん



有の笑顔と流ちょうな日本語で、こちらの緊張を解きほぐしてくれた。

飯塚市の九州工業大情報工学部で電気自動車(EV)製作に取り組むサークル「e-car」の取材。顧問という同世代くらいの男性と名刺を交換すると、解説不能なタイ文字やアルファベット22字に及ぶ長い名前。大変な取材になるかなと一瞬身構えたのだが…。

「もともとは飲み会サークルだったんですよ。タイ出身のハナート・カチヨーンルンアン准教授は、ほほ笑みの国特

同時に海外留学をしながらも彼のような指導者について学んでいる学生たちの将来も楽しみに感じました。(糸山信)

飯塚市の九州工業大情報工学部で電気自動車(EV)製作に取り組むサークル「e-car」の取材。顧問という同世代くらいの男性と名刺を交換すると、解説不能なタイ文字やアルファベット22字に及ぶ長い名前。大変な取材になるかなと一瞬身構えたのだが…。

同時に海外留学をしながらも彼のような指導者について学んでいる学生たちの将来も楽しみに感じました。(糸山信)